

## 第3章 松戸市の歴史

### 1. 旧石器時代（原始）

現在の松戸市域内においてヒトの営みが確認できる最も古い時代は、今から約3万年前の旧石器時代です。この時代は今よりも気温が低く、ことに約2万年前は最寒期にあっており、年間の平均気温が今よりも7℃から8℃低かったと推測されています。また降水量が少なく、乾燥した気候でもあったようです。

人々の活動の痕跡は、台地を侵食して形成された谷の周縁部から集中して発見されています。これまでに同時代の遺物を出土する遺跡は、発

掘調査などにより62か所が確認されており、そのうち最も古い資料は関場遺跡(河原塚)から出土した石器群です(図17)。



図17 主な旧石器時代の遺跡  
(『松戸市史』上巻改訂版)

#### さまざまな石器

この時代に利用されていた石器は、主として狩猟や獲物の加工に用いられた道具類です。ナイフ形石器は狩猟に用いる刺突具しとつや解体具として、槍先形尖頭器やりさきがたせんとうきは石槍の穂先そうき、搔器さくきは肉や皮を削ることや骨・角製品を加工する際に用いられたと考えられています。

#### 旧石器時代の生業

この時代の人々は、狩猟をおもな生業としていたと考えられています。狩猟の対象としてはナウマンゾウ、オオツノジカ、ニホンジカ、ヒグマ、イノシシ、タヌキなどが考えられますが、大型獣が絶滅した旧石器時代の中頃以降は中小型獣を対象としていたようです。

植物質食料の利用については不明な点が多く、また土器のような煮沸容器しゃぶつがなかったため、灰汁抜き技術あくは十分に発達していなかったと考えられています。従って生食が可能なものを除き、植物質食料の利用は部分的であったことが推測されます。

#### 石器づくりと石材から分かる人々の動き

旧石器時代の遺跡を発掘調査すると、石器や石の破片が集中して出土することがあります。



## 土器と弓矢の登場

縄文時代のはじまる約1万3千年前から1万年前頃には、煮炊きに用いる土器が出現します。多くは丸底や尖底の高さのある鉢形の土器で、火を焚く場所に土器の底部を直接据えて用いたと考えられています。またこの時期は主要な狩猟具が槍の穂先である石槍に加え、石鏃が出現し、槍から弓矢へと変化していく段階でもあります。

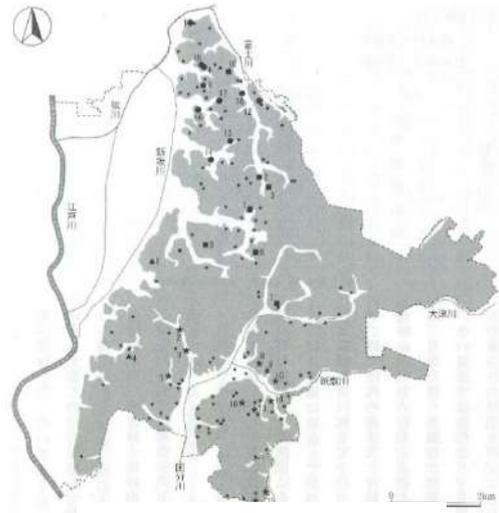


図19 主な縄文時代の遺跡  
(『松戸市史』上巻改訂版)

## 集落形成の進展

1万年前から6,000年前頃にかけて、列島の各地で集落が営まれるようになると、縄文時代特有の生活様式が確立されます。土器は装飾が多様になり、地域差も目立つようになりました。出土する狩猟具としては石鏃が主流となり、弓矢を用いた狩猟が一般化したと考えられます。また堅果類や根茎類のすり潰しに用いたと考えられる磨石や石皿、土掘りや木工に用いたとされる打製石斧や礮器などもこの頃から使われるようになります。



図20 市立博物館  
「縄文の森」：復元された竪穴住居

また縄文時代の人々の信仰や精神文化にかかわると考えられる土偶も出現しています。八ヶ崎遺跡から出土した土偶は、この時期のものであり、関東では最古クラスに属します。

## 縄文海進のピークと貝塚

6,000年前から5,000年前になると海面上昇がピークに達し、現在の江戸川沿いに続く低地や春木川沿いの谷へ海水が入り込んできます。住居の数が増えてムラが形成され、また住居の形状が定型化する傾向が見られるようになります。出土品が重要文化財に指定されている幸田貝塚(幸田)は、この時期を代表する大規模な集落跡でした。ハイガイやマガキ、ハマグリ等を主体とした小規模な貝塚が南北250m、東西180



図21 加曾利E I式土器：根木内遺跡出土 (『松戸市史』上巻改訂版)

mの範囲に点在し、上空から見るとまるで馬の蹄ひづめの形ばてい(馬蹄形)のように連なって分布しています。1930(昭和5)年以来、これまでに行われた発掘調査で住居跡が150軒以上検出されており、拠点的な大集落であったことが明らかになっています。この時期の土器は素地に植物繊維を混ぜ込み、表面には複雑で多様な縄文が施される特徴があります。また口縁部分が波状になるもの、注ぎ口が付されるものも現れ、器種も従来からの深鉢だけではなく、浅鉢も見られるようになります。また髪飾りや耳飾りなどの装飾品も加わり、遺跡から出土する遺物量も増加します。

### 大規模集落と縄文社会の繁栄

5,000年前から4,000年前の時期にはムラが大規模化し、また数自体も増加して分布も密になります。市内では子こ和わ清しみず水みず遺跡(日暮)や中なか峠たけ遺跡(紙敷)がこの時期を代表する遺跡です。この時期の浅鉢は、大形化して食物の加工、盛り付けに適した形になりました。また有孔罎ゆうこうつぼつき付土器などをはじめ土器の装飾は造形的になり(図21)、人面やヘビなどをモチーフとしたものも見られるようになります。石器では磨石すりいしのほか、土掘り具と考えられる打製石斧が多く用いられるようになり、当時の人々の信仰や祭祀にかかわると思われる大型の石棒せきぼうなども出土しています。また漁網おもりに付けたどきへんすい錘しとつぐと考えられる土器片錘、魚を突くのに用いたヤス状刺突具の出土が最も多くなる時期でもあり、内湾での漁撈が活発であったことをうかがわせます。

### 海退と縄文時代の終焉

4,000年前から3,000年前には、引き続き海岸線の後退が進みます。前代の終わり頃からムラの数や規模が減少・縮小する傾向が見られたものの、再び活発なムラの形成がはじまり、直径87mの典型的な馬蹄形貝塚である貝の花遺跡の一部もこの時期に形成されました。土器の種類も増加し、実用とは考え難い形状の特殊な土器も作られています。また土偶や石棒など、縄文人の信仰や祭祀にかかわると思われる遺物も引き続き目立ちます。

縄文時代の最終末期である3,000年前から2,000年前には、遺跡数が激減します。そしてこうした遺跡の減少傾向は、次の弥生時代にも継続して見られます。

## 3. 弥生時代 (原始)

中国大陸や朝鮮半島から渡来した人々により、稲作を中心とした農耕文化や新しい技術が日本列島にもたらされます。これまでの狩猟や漁撈、採集により食料を獲得していた縄文時代の生活様式に代わり、土地を耕して食料を生産する新しい暮らしが始まります。

## 縄文から弥生へ

松戸市域では、縄文時代の終わり頃から弥生時代の初めにかけて遺跡の数が激減します(図19と図22を比較)。今のところ、松戸市内で見つかった最も古い弥生土器は、大谷口遺跡(大谷口)から出土した壺形土器(貯蔵用)や甕形土器(煮炊き用)などで、弥生時代の中頃(紀元前3世紀から紀元前2世紀)のものとされています。この頃から、稲作をとまなう農耕文化が、現在の松戸市が位置する地域へ浸透しはじめたようです。また、市域の南端に位置する立出し遺跡(栗山)では、指輪と見られる青銅製品が出土しており、僅かながらも新しい技術の伝来を伝えています。



図22 主な弥生時代の遺跡  
(『松戸市史』上巻改訂版)

## 広がる人々の暮らし

やがて松戸市内でも少しずつ弥生時代の遺跡数が増加します。その分布と立地の中心は、江戸川沿いの低地に面した台地と国分谷の西岸台地上であり、諏訪原遺跡(和名ヶ谷)など現在までに23か所が確認されています(図22)。

## 4. 古墳時代 (原始)

農耕により食料を生産する新しい暮らしが広まると、やがて富を蓄えた有力者が生まれます。さらに富が偏在する傾向が進展して支配・被支配の関係が生じるようになると、九州から東北の各地に大首長が誕生し、蓄えられた力を基に巨大な墳墓が築かれる時代をむかえることとなります。古墳が築造された時代は、おおむね3世紀の中頃から8世紀初頭までです。またこの新しい時代が到来する背景には、これまでにない列島規模でのモノや人々の移動、あるいは交流の活発化があります。



図23 主な古墳時代の遺跡  
(『松戸市史』上巻改訂版)

## 弥生から古墳時代へ

諏訪原遺跡(和名ヶ谷)<sup>かみやきりみなみだい</sup>と上矢切南台遺跡(上矢切)は、弥生時代から古墳時代へ移り変わる時期に営まれた集落跡です。諏訪原遺跡では23軒、上矢切南台遺跡では9軒の竪穴住居が見つっています。近畿や東海地方の土器も出土しており、調査区の一隅からは環濠<sup>かんごう</sup>の可能性が指摘される溝も確認されています(図24)。方形周溝墓も富山遺跡(稔台)<sup>とみやま</sup>で1基、溜ノ上遺跡(幸谷)で2基見つっており、いずれも古墳時代の初頭に位置付けられています。



図24 上矢切南台遺跡検出の溝  
(『松戸市史』上巻改訂版)

## 5世紀の松戸 河原塚古墳群と小金古墳群

古墳時代の半ば、5世紀になると東アジアの緊迫した情勢の影響を受け、中央のヤマト王権が軍事力を基盤とする政権へ変化します。そしてヤマト王権は地方と結びつきを強めていき、その影響により列島各地で権威を誇示する巨大な前方後円墳が築造されます。一方で朝鮮半島との交流は一層盛んになり、物品ばかりでなく新しい技術を持った<sup>こうじん</sup>工人が渡来するようになります。



図25 河原塚1号墳(市史跡)

河原塚古墳群(河原塚)は5世紀後半を中心に造営されました。国分谷を臨む台地上の5基の<sup>えんぶん</sup>円墳のうち、1955(昭和30)年に1号墳(図25)の発掘調査が行われ、墳頂部<sup>ふんちようぶ</sup>から二基の埋葬施設が検出されました。1号墳の規模は、<sup>しゅうこう</sup>径約26m、現存高約4mの円墳で周溝が巡らされています。

縄文時代後期の貝塚上に築かれていた1号墳では、溶け出した貝殻のカルシウムにより、通常では残らない埋葬人骨が遺存していました。第一埋葬施設には、50歳以上の男性と3歳位の幼児と一緒に埋葬されていたことが明らかになっています。副葬品として鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鹿角装<sup>てつぞく ろっかくそう</sup>

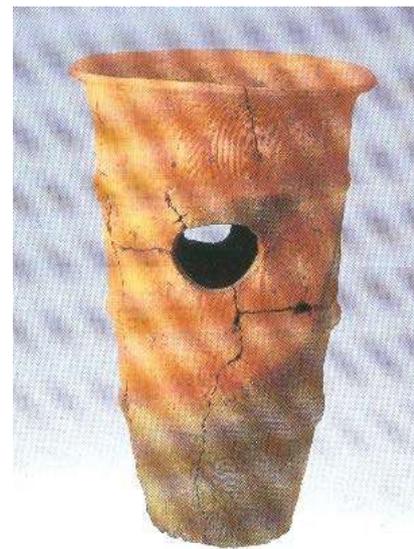


図26 円筒埴輪:小金古墳1号墳出土  
(『松戸市史』上巻改訂版)

とうす  
刀子、ガラス製小玉が出土していますが、埴輪が一片もない点は特徴といえます。市立博物館には、これら副葬品と、被葬者の復元模型が展示されています(p102 図67)。

小金古墳群の小金1号墳(小金)は、2018(平成30)年にはじめて周溝部分を対象とする発掘調査が行われました。墳丘部が径約23mの円墳で、周溝の幅は約5m、深さは1mから 1.4m。周溝からは埴輪えんどうはにわを主体に、朝顔形と動物埴輪も出土しています。円筒埴輪は外面に三条の突帯とつたいが巡り、下から二条目と三条目の間に透かし孔が開けられるという特徴を持ち、口縁付近には「×」字状の線刻が施されたものが認められます。年代は5世紀の終わりから6世紀前半頃と考えられています(図26)。

またこの時期には住居内に竈かまどが設けられます。これに伴い、煮炊きに用いていた甕かめや蒸し器も竈に適応して形態を変化させ、大形化します。さらに煮炊きする場が壁際に固定されて、住居内の中央に広いスペースができ、住まい方にも変化がもたらされたと考えられます。

#### 6世紀から7世紀の様相 栗山古墳群と立出し遺跡・天神山遺跡

これまで古墳が築かれなかった地域にまで、中小規模の円墳が見られるようになります。被葬者も大首長や特定の支配者などではなく、ムラの有力者やその家族といった階層の人々であったと考えられています。栗山古墳群(栗山)は、市川市域を主体とする国府台古墳群の北端に位置しており、本来は江戸川を臨む台地上に展開する広域な古墳群の一部と考えられています。



図27 馬形埴輪頭部:栗山古墳群出土  
(松戸市立博物館『古墳時代の飾り馬』図録)

遺跡範囲内の山林内には、2基の墳丘が現存していますが、このほか隣接する立出し遺跡と天神山遺跡てんじんやま(栗山)で行われた発掘調査で 12 基以上の円墳が確認されました。多くは墳丘部の径が20m以下のものであり、年代的には6世紀末から7世紀初頭と考えられています。

### 5. 奈良時代・平安時代 (古代)

古墳時代中期に成立したヤマト政権は、やがて日本列島の北から南までその支配を拡張していきます。支配体制の根幹には、全ての土地と人民を天皇の下に集める公地公民制こうちこうみんせいを基礎とする律令制度りつりょうがありました。これにより中央集権的な官僚制、公民支配、地方行政、身分制、軍事などの制度や機構を整備して統治を確立しました。

## 古代の行政区分

701(大宝元)年に制定された大宝律令では、全国を国・郡・里(のちに「郷」という行政単位に分け、それぞれ国司・郡司・里長により統治させました。現在の松戸市域は下総国の葛飾郡内に含まれます。当時の葛飾郡の範囲は、東京都葛飾区・江戸川区北東部・墨田区北部から千葉県流山市・市川市・船橋市・柏市・鎌ヶ谷市、埼玉県三郷市付近まで及んでいたと考えられています。



図28 主な古代の遺跡  
『松戸市史』上巻改訂版

## 古代の道・国府と市内の遺跡

この時代には交通体系の整備も行われました。武蔵国府・下総国府・常陸国府を結ぶ東海道の本道は、下総国府の比定地である市川市国府台から松戸市内を通り、手賀沼の西岸に達していました。松戸市内にある古代の遺跡も、国府が置かれた市川市寄りの市域南部に集中する傾向が見られます(図28)。

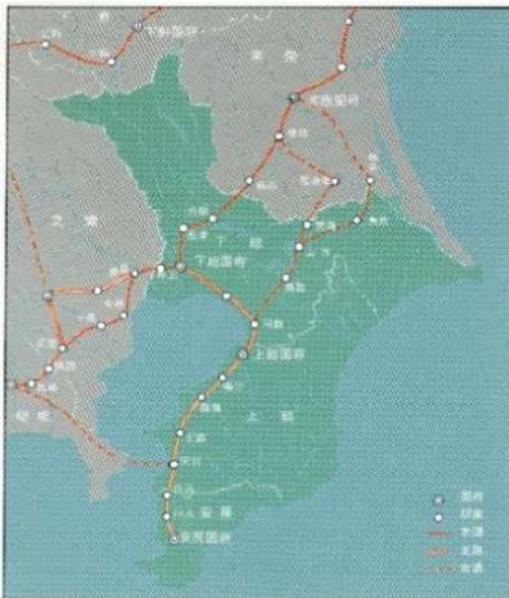


図29 古代の主要駅路



図30 帯金具(市有形):小野遺跡出土



図31 「石世」銘  
墨書土器:小野遺跡出土

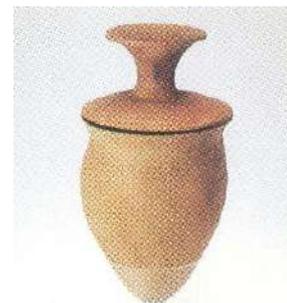


図32 「國厨」銘  
墨書土器(市有形)  
:坂花遺跡出土

1992(平成4)年に発見された小野遺跡(胡録台)については、これまでに41地点で発掘調査が行われ、43軒以上の竪穴住居、5基の掘立柱建物跡が検出されています。

住居から出土した遺物では、銅製の帯金具が注目されます(図30)。これは律令時代の官人の

位階を表す革のベルトに付けられていた金具で、小野遺跡ではバックルの部分からベルト先端部分までが揃って出土しています。また小野遺跡の近くには、下総国府から常陸へむかう東海道が通っていたと推定されており(図29)、下総国府から遠からぬ位置、しかも国府へ通ずる幹線道路沿いに形成された大規模な集落跡であったことが明らかになっています。

坂花遺跡(紙敷)から出土した墨書土器(図32)も、国府との関連をうかがわせる遺物です。墨書土器とは、土師器や須恵器の底や外面などに人面などの絵、地名や施設名、人名などを墨書きしたのですが、坂花遺跡出土の土器には、骨蔵器の蓋部分に国府の食料や食器の供給施設を意味する「<sup>くにのくりや</sup>國厨」の墨書が記されています。

## 6. 中世

東国では長い争乱の時代が続いて荒廃が進む一方、広大な田畑を開墾し富を蓄える者が現れます。こうした在地の有力者は武力を備えた領主でもありました。一方で中央政府による画一的な支配は次第に衰え、地方で力を増したこれら武士階級が新しい時代の担い手として台頭することになります。

鎌倉幕府の成立に大きく貢献した千葉氏は、多くの子孫が幕府の御家人として認められました。市内の上本郷が拠点と考えられる風早氏もそうで、承久の乱の時は幕府軍の一員として奮戦し、千葉一族全員が負担した香取神宮(香取市)の建て替えという大事業でも名前が挙がるなど、活躍していたことがわかっています。

### 関東の争乱

鎌倉幕府滅亡から南北朝時代にかけては、関東の武士達を巻き込んだ全国規模の争乱が起きました。続いて室町幕府将軍から関東の支配を任されていた足利氏と、その補佐役の上杉氏の対立が深刻化します。ついに1454(享徳3)年、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を謀殺する事件が起き、これを契機として戦国時代に突入します。

下総の千葉氏内部では公方と関東管領のいずれに付くかで対立が生まれ、1456(康正2)年の市河合戦(現市川市の市川から真間・国府台)を経て、庶子の馬加系千葉氏が公方の力を得て主流となります。この馬加系千葉氏を支え、戦乱を通じ重要な役割を果たしたのが重臣の原氏です。やがて古河公方(足利氏が古河へ移ってからの呼称)と関東管領上杉氏との争いは和睦によって終結しますが、その後も上杉氏内部の抗争や、さらには相模国小田原を拠点とした北条氏が対抗して勢力を伸長するなど、新たな局面が展開することになります。

## 小金城主高城氏

出自については諸説ありますが、千葉氏またはその重臣で主家をしのぐ勢力を持っていた原氏の家臣として出奔したと考えられています。信頼できる史料では、『本土寺過去帳』の「永享九(1437)六月 クリカサワ 高城四郎右衛門清高」という記載が初見ですが、同じ15世紀代には他に市内の馬橋や、我孫子でも高城氏の名が見えており、葛飾郡東部から相馬郡南部の各所に拠点を獲得していたことがうかがえます。

## 相模台合戦

古河公方足利高基と弟足利義明は、公方としての正当性をめぐり対立していました。1517(永正14)年、古河公方を支援する千葉氏は足利義明らの攻撃を受け、原氏の拠点小弓(千葉市)を奪取されてしまいます。これにより原氏は、一時的に小金に拠点を移したようです。その後、千葉氏と原氏は小田原の北条氏に接近、これに対する足利義明は安房の里見氏と連携を図ります。そして1538(天文7)年に両者は市内の相模台を主戦場として衝突、この合戦によって足利義明は討死、里見氏も勢力後退を余儀なくされます(いわゆる第一次国府台合戦)。一方、原氏が小弓へ復帰すると、いよいよ高城氏が小金領の主権を掌握することになります。

## 上杉謙信の襲来

1561(永禄4)年、由緒ある上杉姓と関東管領職を得た上杉謙信ですが、それは北条氏の本拠小田原城攻撃最中の出来事でした。その際、謙信の下に参集した関東の武家の中に「下総衆」としては唯一、高城氏の名が記されています(「高城下野守 井けた二九やう」『関東幕注文』)。相模台合戦後に再び脅威となっていた安房里見氏に対抗するため、北条氏へ接近していた時期です。高城氏の置かれた立場の微妙さがうかがわれます。

## 国府台合戦 西原文書～北条氏康書状

上杉謙信が越後へ帰国すると、北条氏は武蔵国の攻略を再開します。これに対し里見氏が市川へ進出、反北条の太田氏へ救援の兵糧を送る準備をしていました。松戸市指定有形文化財の西原文書(図33 北条氏康書状)は、まさに国府台合戦前夜の緊迫した状況を伝えています。この西原文書によると、江戸城の遠山氏と小金城

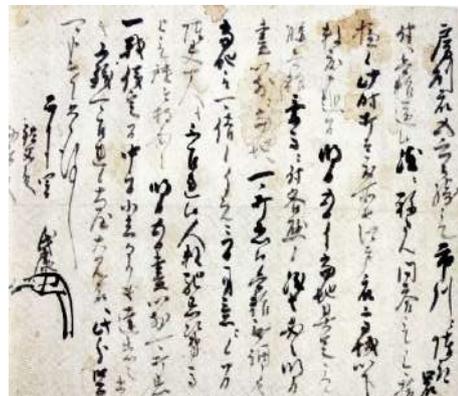


図33 北条氏康書状  
西原文書(市有形)

の高城氏が、兵糧の値段で折り合いがつかずに時間を空費する里見軍の状況を察知、北条氏康<sup>うじやす</sup>に対して早く攻撃を仕掛けるべきであると何度も進言していたことが分かります。結果、北条氏康は進言を受けて電撃作戦を展開し、里見氏を退けることに成功していました。1564(永禄7)年正月の出来事です。



図34 根木内城跡(昭和 22・23 年頃  
米軍撮影:国土地理院長の許可を得て複

### 高城氏に関わる中世の城

〔根木内城(図34・35)〕 旧小金宿の街並みから谷を隔てて約1km東の位置、細い谷津に挟まれて半島のように北へ伸びる台地上に築かれています。主郭を中心とした6つの郭<sup>くるわ</sup>が台地北側の先端部に配され、その南側には台地を横断する二条の空堀によって区切られたやや広い区画が続いています。2003(平成15)年に実施した発掘調査では、障子堀<sup>しょうじぼり</sup>が発見されました(図35)。障子堀



図35 根木内城跡第2地点  
検出した障子堀

は、防御力を高めるため、堀底に仕切りを連続させた形状の空堀です。いずれも後に埋め立てられ堀底道に造り替えられています。この改変は城を取り巻く情勢の変化を反映したものと考えられます。城跡の調査により出土した瀬戸・美濃地方産の陶磁器の年代は、おおよそ15世紀後半から16世紀前半に集中しており、城としての最盛期もこの時期であったと思われます。出土遺物全体を概観すると、小金城跡に比べ権威を象徴する輸入陶磁器などが相対的に少なく、在地産の土器類を含め日常生活に伴う雑器が主体となっています。

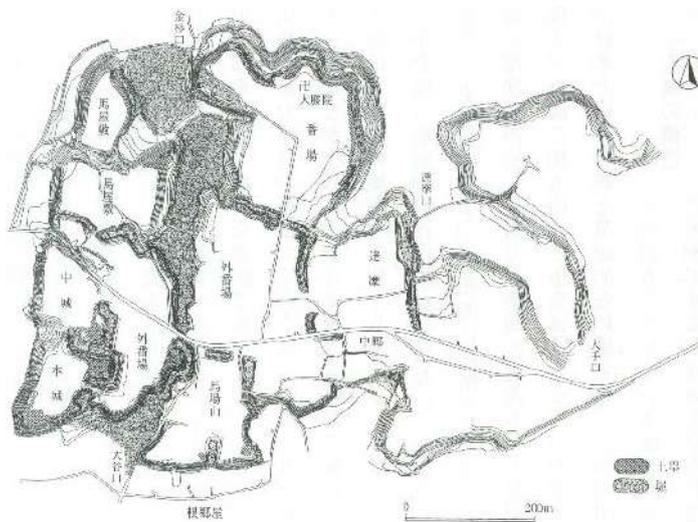


図36 小金城跡測量図(『松戸市史』上巻改訂版)

〔小金城(図36)〕 現在の JR 北小金駅の北西一帯、西方の低地を臨む台地上に位置しています。城域の南北二方に

はやや大きな谷が入り込み、その先端が湾曲することで城域東端の台地を狭めています。このよ

うに周囲を谷に囲まれた独立性の高い地形を利用し、随所に大規模な改変を加えることで小金城は築かれています。小金城の主郭は城域内の南西隅に設けられていました。

小字<sup>こあざ</sup>で「本城」と称される範囲がこれに該当します。これより北へは同じく小字「中城」・「馬屋敷」の郭が連続し、「本城」・「中城」を覆うように「外番場」が配されています。

これらの郭群は、北側の金杉口と南側の大谷口から入り込む谷と空堀によって独立性を一層高めており、小金城の枢要部であることがうかがえます。この郭群の東側には「番場」・「外番場」・「馬場山」が並列し、大手口側には「達摩」・「中郷」などやや広い郭群が配置されていました。これまでに城域から出土した国産陶磁器類の年代は、15世紀後半からほぼ16世紀全般にわたりますが、この期間がそのまま小金城が機能していた期間と見て間違いのないようです。

ところで江戸川流域から手賀沼沿岸にかけての領域は、小金城を中心に政治と経済のまとまりとして、小金領と称されていました。現在の松戸市・市川市・流山市と、柏市・我孫子市・鎌ヶ谷市・船橋市の各一部を含む範囲です。その成立は、高城氏が小金城主になる 1540 年頃よりも前に原氏によって形成された可能性が高いと考えられています。発掘調査で明らかにされた小金城の特徴は、15世紀後半から近世初頭まで継続的に出土遺物が見られること、輸入陶磁器が相対的に多く出土していることです。これは小金領の本拠に相応した様相であり、交通の要衝に位置していた小金の宿は、小金城の城下町として位置付けられることとなります。

### 高城氏に関わる寺院

〔東漸寺：小金 浄土宗〕 高城氏とともに根木内から移転してきたとされています。小金の町の中心に建てられており、高城氏による町場支配の要、小金城のいわば出先機関としての役割も果たしていたと見なされます。江戸時代には浄土宗の関東十八檀林<sup>だんりん</sup>(学問所)の一つに数えられ、また二代将軍秀忠の葬儀に際して大導師<sup>だいたうし</sup>を務めた増上寺<sup>ぼっすりようがく</sup>の法主了学(元東漸寺住職)は、高城氏の一族であったと言われています。

〔大勝院：大谷口 真言宗〕 小金城域内の北端に建ち、東漸寺同様に根木内から移転してきたとされています。15世紀に成立したとされる徳蔵院(日暮)や、1416(応永23)年銘の阿弥陀如来立像(市有形)を所蔵する光明寺(ニツ木)など多くの末寺を有しています。

〔広徳寺：中金杉 曹洞宗〕 古くからの高城氏<sup>ぼだいしよ</sup>の菩提所であり、小金移転に伴い栗ヶ沢から移転したとされています。江戸時代に旗本として家の存続<sup>かな</sup>が叶った高城氏が、あらためて墓所を造営したゆかりの深い寺院です。小金原にある萬福寺は末寺の一つです。

〔慶林寺：殿平賀 曹洞宗〕 高城胤吉が亡き妻「桂林尼」の菩提を弔うために建立した寺院で、小金城の外郭部、大手口付近に位置しています。また慶林寺には、胴の内側に「1584(天正十二年)甲申四月十一日」の墨書銘がある太鼓が伝来しています。

〔本土寺：平賀 日蓮宗〕 創建の時期は13世紀後半から14世紀初頭、鎌倉時代後半頃とされています。開山は日蓮の直弟子の日朗、またはその高弟の日伝(のちに日典)です。時勢の移り変わりによる大きな影響を被りながら、原氏や高城氏の帰依により発展を遂げました。ここに伝わる『本土寺過去帳』は、1583(天正11)年にそれまでの古い過去帳を転写し改訂を加えて成立したものです。15世紀から17世紀にかけての200年以上にわたる膨大な記録であり、そこには他に例をみないほど豊富な情報が記載されています。

### 小田原合戦と高城氏の退場

16世紀後半頃から北条氏への従属度を増していた高城氏は、1590(天正18)年の小田原合戦に北条方として参戦しています。戦いは豊臣秀吉の勝利で終結し、これにより高城氏は松戸市域から退場し、本拠である小金城も歴史的役割を終えることとなります。

## 7. 近世

17世紀初頭に成立した徳川幕府は、村を行政単位とする支配体制を確立します。村は名主や組頭などの村役人、年貢などの直接的な負担者であり村の正式な構成員である本百姓、小作によって生計を維持する無高の百姓によって構成されていました。これに対し領主は、村単位に年貢や諸役を課して徴収、宗門改めや五人組制度によって農民支配を進めました。

江戸時代の松戸市域には57の村があり、幕府の直轄地に加えて旗本領や大名領に分かれていました。

### 新田開発

市内には〇〇新田という地名がいくつかありますが、これは江戸時代に新たに開墾された新田村落の名残です。初期には江戸川沿いの低地、その後は江戸川沿いの低地と小金牧の周縁部、18世紀前半には小金牧内を対象として実施され、低地では水田が、台地上では畑地が新たに開かれました。江戸川沿いの低地

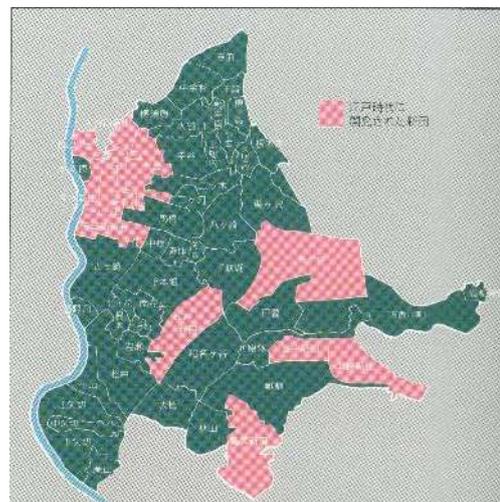


図37 江戸時代に開発された新田

では、七右衛門新田・主水新田・九郎左衛門新田・伝兵衛新田などが水田として開発され、台地上では松戸新田・高塚新田・金ヶ作・串崎新田・田中新田が田畑として開発されました(図37)。

## 治水の歴史

成立間もない江戸幕府は洪水対策と河川交通の便を図るため、利根川の流路変更に着手します。それまで江戸湾に流入していた利根川を、渡良瀬川や常陸川と合流させて流路を変え、銚子から太平洋へ流すという大事業でした。その一環として渡良瀬川の下流部分に当たる現在の江戸川にも大規模な開削が実施されました。その後も流路の屈曲部分を直線的に改修する工事などが随所で行われ、それに伴い沿岸の河岸や舟運による輸送ルートの整備も次第に進められます。

また江戸川沿いの低地は、台地縁辺の谷頭からの湧水や台地上に降った雨水が流れ込む場所でもあり、たびたび出水による被害に遭っていました。こうした悪水の流れを、農耕経営に適した流路に整備して江戸川へ落とすため、坂川の開削が行われます。しかし江戸川堤防や悪水排出口(扒樋)の耐久性の問題や、江戸川の水位によっては排水できないどころか逆流することさえあったことから根本的な問題解消には至らず、地域の人々は長年にわたって水害に悩まされます。

## 江戸川の河岸と鮮魚(生)街道

はじめ銚子から江戸への鮮魚輸送は、布佐(我孫子市)から手賀沼の水路を通り白井で陸揚げするか、利根川の木下河岸で陸揚げして大森(印西市)・平塚(白井市)・鎌ヶ谷・行徳(市川市)を陸送する行徳道が本道でした。その後、手賀沼周辺の開発が進んだことで布佐から平塚までの近道ができ、これにより富塚(白井市)、市内の金ヶ作を経て松戸河岸へ至る鮮魚街道が主流となります。

江戸川沿いに設けられた松戸の河岸には、金町松戸関所と下横町を結ぶ渡船の往還河岸、船宿が設けられ舟運船の停泊地となった平瀧河岸、その中間に荷扱いの河岸として発達した納屋河岸(良庵河岸)がありました。(鮮魚街道と水戸道中のルートについては p107 図72参照)

## 水戸道中と二つの宿場

水戸道中は、江戸と水戸を結ぶ当時の主要な街道の一つでした。日光道中千住宿(足立区)から分岐、最初の宿の新宿(葛飾区)でさらに佐倉道と分かれ、金町松戸関所を経て江戸川を渡り松戸宿、次の3番目の宿が小金宿、その後我孫子や取手、土浦などを経て水戸徳川家の本拠水戸城下に至ります。江戸日本橋から水戸までの総距離は30里14丁(119.3 km)、一般の旅行者で2泊

3日、水戸藩主が通行する場合は3泊4日を要しました。

宿場は武士などの公的な通行を保証し、人足や馬を常備して人や荷物を次の宿まで継ぎ送り、休泊の場を提供した町場です。宿の中央には人馬の手配をする問屋場、本陣と脇本陣が置かれていました。

松戸宿には下横町・宮前町・三丁目・二丁目・一丁目・納屋河岸・平潟の7つの町場が形成され、1851(嘉永4)年には468戸、人口2,224人(『松戸市史 中巻』)を数えるほどの大きな宿場に発展しています。宿場の中心は本陣や問屋場の置かれた宮前町で、街道沿いには商店や旅籠が軒を連ねていました。また毎月4と9の日には市が立ち、周辺の農村からも大勢の人々が集まりました。

小金宿は中世以来の交通の要衝で、早くから町場が形成されていました。宿内は上町・中町・下町・横町の4つの町場に区分され、中町に本陣や問屋場のほか、水戸徳川家専用の旅館「水戸御殿」がありました。宿場の規模は松戸宿よりやや小さいものの、上町には小金牧を管理した野馬奉行綿貫氏の役宅、中町には関東十八檀林のひとつである東漸寺、下町には普化宗の一月寺があるなど特徴的な街並みを形成していました。

#### 一茶と馬橋 近世後期の文化と交流

松戸宿と小金宿の間にある馬橋の町場は、鎌倉時代の創建とされる萬満寺(臨濟宗)の門前町として古くより発展していたようです。この馬橋で油絞り問屋を営んでいた大川平右衛門は、栢日庵立砂の号を持つ葛飾派の俳人でした。息子斗圍も父の俳業を継承し、地方俳壇の中心的な存在として活躍しました。また二人は小林一茶との親交が深く、後援者として、また友人として親しく交際していた様子が一茶の句日記からうかがえます。

#### 小金牧

慶長年間(1596~1615)に徳川幕府によって開設された小金牧は、当初は七牧で始まり、高田台牧・上野牧・中野牧・下野牧・印西牧の五牧が継続して運営されました。その範囲は、北は現在の野田市から南は千葉市の一部に及ぶ広大なもので、松戸市域は中野牧に重なります。

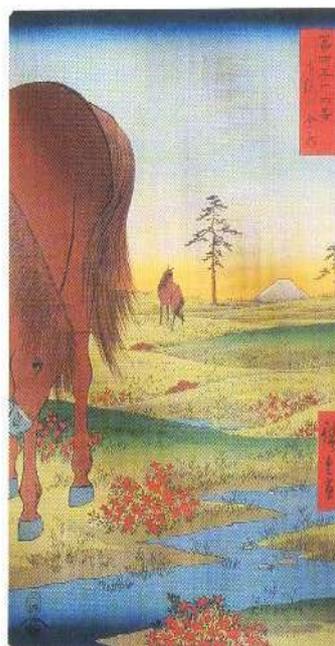


図38 歌川広重  
『富士三十六景下総小金原』  
(松戸市立博物館『馬と牧』図録)

## (1)野馬の管理と牧士

広大な牧は村々や耕作地、道路などと隣接しています。そのため野馬が人の生活圏へ入り込むことを防ぎ、野犬などが牧内へ侵入しないようにするため、牧との境には野馬除土手や野馬堀が巡らされていました。これら牧の運営には、小金に役宅を持つ野馬奉行の綿貫氏があたっていましたが、享保年間(1716～1736)に金ヶ作役所が設置されると、両者が分担して経営するようになります。

野馬奉行の下で働く牧士は名字帯刀、乗馬、鉄砲の所持を許された武士で、牧の周辺に住んでいました。年1回行われる「野馬捕り」の指揮のほか、毎月6回の巡視を行い、野馬の世話や野馬土手の修繕など牧の実際的な管理を担っていました。

## (2)野馬捕り

村々から動員された勢子たちが、牧内の「捕込」という囲いの中へ野馬を追い立て、牧士の指揮に従って野馬を捕獲しました。優良馬は武士の騎乗用に、他は農耕・使役馬としてセリに掛け民間に払い下げられました。市指定文化財「幸谷観音野馬捕りの献額」(福昌寺)(幸谷)には、活気ある野馬捕りの様子が描かれています。

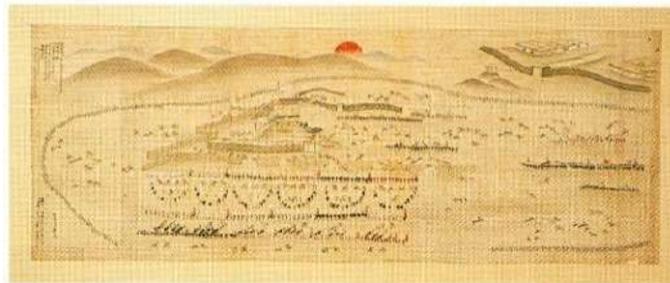


図39 寛政七年小金原御鹿狩絵図(市有形)

## (3)御鹿狩

牧内にはシカやイノシシなどがたくさん生息していました。これらの駆除と軍事教練も兼ねた「御鹿狩」が、8代将軍

吉宗の1725(享保10)年と1726(同11)年、11代家齊の1795(寛政7)年、12代家慶の1849(嘉永2)年の4回実施されています。1回目の御鹿狩の際には12,000人余の勢子が動員され、シカ832頭とイノシシ5頭、オオカミ1頭の獲物があったと記録されています。また市指定文化財の「寛政七年小金原御鹿狩絵図」(図39)には、将軍の御座所である「御立場」を中心に3回目の狩りの様子が描かれています。御立場が設けられた位置は、現在の五香公園付近でした。その後は、牧内で植林事業や新田開発も行われて次第に牧内の獣が減少し、4回目の御鹿狩では遠隔地で獲ったシカやイノシシを放ちました。

## 徳川昭武と戸定邸

徳川昭武は水戸藩主徳川齊昭<sup>なりあき</sup>の第18男です。16歳年長の兄、江戸幕府15代将軍慶喜<sup>よしのぶ</sup>により才能を見出され、1867(慶応3)年(日本出発当時満13歳)、パリ万国博覧会に将軍名代<sup>みょうだい</sup>(代理)として派遣されました。昭武は滞在国フランス以外にも5か国を歴訪して各国元首<sup>げんしゅ</sup>と交流し、先進的なヨーロッパ文明を視察します。慶喜が年若い昭武を派遣したのは、西洋の教養を身につけて各国宮廷で人脈を築き、将来、国政を担わせる意図があったと考えられます。しかしパリでの留学生活に入る1867(同3)年12月頃には幕府主導の政治体制はすでになく、昭武が明治政府下で政治に関わることはありませんでした。1876~1881(明治9~14)年には、再びヨーロッパで留学生活を送るとともに、個人的な旅行や留学生との交流を通じて、知見を広げました。



図40 徳川昭武肖像  
(松戸市教育委員会所蔵)

1883(明治16)年には、29歳の若さで水戸徳川家の家督を甥に譲って隠居します。これに先立ち、私邸である戸定邸<sup>とじょうてい</sup>の建設を始め、1884(同17)年に生活の拠点を移します。1882(同15)年に再会した兄・慶喜とは晩年に至るまで親密に交際し、戸定邸や松戸の近郊で共通の趣味の釣りや狩猟、写真撮影などを楽んでいます。

## 8. 近代から現代

明治を迎えた松戸は、廃藩置県<sup>はいはんちけん</sup>で葛飾県、後に印旛県を経て千葉県に属し、政府の文明開化政策により近代化への道を歩みます。この時代、松戸町には東葛飾郡役所や郵便局、警察署、裁判所が設けられ、東葛の行政の中心地として発展しました。

### 五香六実の開墾

明治維新直後の東京はいまだ世情が不安定であり、人々の暮らしは苦しいものでした。

新政府はこうした困窮者<sup>じゆきん</sup>に対する授産事業として、旧小金牧の開墾を計画します。はじめ東京の有力商人たちに開墾会社を作らせ、これに事業を請負わせる方法をとりましたが、間もなく事業は挫折してしまいます。



図41 六実地区の畑 (昭和35年)  
(『五香六実の歴史』)

その後、周辺の村々から移住してきた農民により開拓は進捗し、徐々に原野が拓かれていきました。五香六実地区はこうして拓かれた新しい土地です(図41)。

### にじっせいきなし 二十世紀梨の誕生

松戸における梨栽培の歴史は江戸後期に遡り、幕末頃にはすでに江戸の市場でも名声を博していたと言われています。明治に入ると梨の需要は著しく増大、これに伴って松戸市内の梨の作付面積は年々増加していきます。そうしたなか大橋(当時八柱村)の松戸覚之助は、親戚宅で見つけた発芽したばかりの梨の苗を育て、1898(明治 31)年にはじめて成熟果を得ることに成功します。

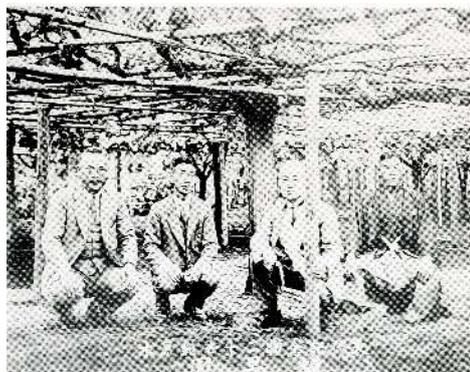


図42 「天然記念物指定の日」(昭和10年)  
(『松戸市制50周年記念誌 はばたき』)

その梨は、果肉が白くてあっさりした甘味と滴<sup>したた</sup>るような水分があり、後に「二十世紀」という新品種名を与えられ、一躍全国にその名を知られるようになりました。

### 県立園芸学校の創立

日露戦争後の不況が続くなか、資本主義の発展に対応した実業教育の振興が求められるようになります。千葉県は「専門学校」を設立する計画を進め、1909(明治 42)年、松戸町に千葉県立園芸専門学校を創立しました。1914(大正3)年には名称を千葉県立高等園芸学校に変更、あらためて園芸に関する高度な学問技術の教授を目指しました。



図43 湯浅四郎<千葉県立高等園芸学校>  
(千葉大学園芸学部所蔵 大正6年頃)

その後、1929(昭和4)年には文部省の所管となって千葉高等園芸学校と改称され、戦後の1949(同24)年に千葉大学園芸学部、2007(平成19)年には同大学大学院園芸学研究科となり今日に至ります。

当初の千葉大学園芸学部のキャンパスには、西側に校舎と庭園、東側に温室と露地の花卉・野菜・果樹などの圃場<sup>ほじょう</sup>と、それぞれの研究棟が配置され、一体的で実践的な教育体制が採られていました。その後1991(平成3)年に付属農場は柏キャンパスに移転しましたが、旧農場区域は引き

続き各研究室の実験圃場となっています。このほかイタリア・フランス・イギリスの各様式の庭園やロックガーデンなども整備されており、2009(平成21)年には(公社)日本造園学会から「近代造園遺産」に選定されています(「千葉大学園芸学部のキャンパスと庭園」『庭園の記憶』2009 藤井英二郎)。

### 松戸競馬場の開設

日清・日露戦争の反省から、日本在来馬の体格向上と供給体制の整備が、緊急かつ重要な課題とされました。そのため国産馬の改良は官民挙げて進められます。なかでも競馬会の開催は民間の優良馬輸入を促し、優れた国産馬の選抜を進める早道と考えられ、推奨されました。1905(明治38)年から翌年にかけて松戸で開催された競馬会は、こうした趣旨に基づいたもので、相模台の地で春秋2回にわたり開催されました。

1906(明治39)年から総武牧場株式会社が組織され、競馬場の設備が整えられました。翌年、社団法人の認可を受けて総武競馬会が発足しましたが、政府の方針により馬券売買が禁止されます。1909(同42)年に公益法人松戸競馬倶楽部<sup>くらぶ</sup>が運営を引き継ぎますが、1918(大正7)年末頃には陸軍工兵学校用地として陸軍がこの土地を買収し、松戸競馬場は短い歴史に幕を閉じます。なお松戸競馬倶楽部は、その後船橋へ移転して中山競馬倶楽部と改称、やがて現在のJRA中山競馬場へ発展していきます。

### 八柱霊園

1930(昭和5)年当時の東京市は、人口増加に伴う墓地不足解消のため新墓地造成計画を作成し、八柱村田中新田の土地を買収しました。1935(同10)年7月には、ここに東京市営八柱霊園を開園します(開園時:面積約74.5ha、現在:105.2ha)。八柱霊園は、日本ではじめて「霊園」の名称が付けられた郊外型公園墓地で、ケヤキ並木の参道(延長700m)を有し、敷地面積の半分が墓所、残りは園路・緑地・広場等で構成されています。園内には嘉納治五郎<sup>かのうじごろう</sup>(柔道家)や西条八十<sup>やそ</sup>(詩人)、田中寅三<sup>とらぞう</sup>(洋画家)、板倉鼎<sup>かなえ</sup>(洋画家)、奥山儀八郎(版画家)、小松崎茂(挿絵画家)などをはじめ、多くの著名人の墓所があります。

### 陸軍工兵学校と千葉大学工学部(旧東京高等工芸学校)

1919(大正8)年11月、松戸競馬場のあった相模台の地に陸軍工兵学校が開校しました。この学校は、目まぐるしく進歩する近代戦に対応するため、工兵将校と下士官を育成するとともに、新たな技術と戦略の研究を行うことを目的として設立されました。現在の松戸中央公園と聖徳大学

・現在の松戸中央公園と聖徳大学・聖徳大学短期大学部、松戸市立第一中学校のある範囲が工兵学校の敷地であり、その南側は付属する校南作業場でした。

なお中央公園の正門は陸軍工兵学校当時のものであり、傍らに建つ歩哨舎ほしやうしやうしやとともに市有形文化財に指定されています(図44)。また正門左手にあった将校集会所前の庭園は、千葉県立高等園芸学校(現千葉大学園芸学部)教授の設計指導により造園されたもので

す。このほか工兵学校関連では、第一中学校の東側に相模台練兵場れんべいじやう、現在の稔台地区には広大な八柱作業場(演習場)があり、胡録台には装甲作業車両そうこの訓練基地(後に兵舎に変更)が設けられていました。

松戸の工兵学校と津田沼の鉄道連隊が敷設した演習用の軽便鉄道けいべんてつどうの軌道敷きどうしきは、戦後払い下げを受けた新京成電鉄が引継ぎ、ルートの一部改変しながら 1955(昭和30)年に松戸と京成津田沼を結ぶ全区間を開通させ、沿線地域の発展に大きく貢献しています(『新京成電鉄』2012 編著白土貞夫 彩流社)。

終戦直後の 1945(昭和20)年10月には、東京芝浦にあった東京工業専門学校が旧陸軍工兵学校の校舎に移転してきます。この学校は、1921(大正10)年に設立された東京高等工芸学校を前身に持ちます。同校は、1949(昭和24)年に学制改革による新制大学発足により千葉大学工芸学部となり、1951(昭和26)年には工学部に改組され、1964(昭和39)年に一部の施設を残して千葉市に移転しました。

#### 逓信省航空局中央航空機乗員養成所の開設と帝都防衛

日中戦争の最中、旧松戸町串崎新田、東葛飾郡高木村五香六実などに広がる山林や畑地約130万㎡の土地が整備され、逓信省航空局中央航空機乗員養成所ていしんしやうが建設されました(図45)。着工は1939(昭和14)年。工事は請負会社のほか、周



図44 旧陸軍工兵学校正門(市有形)  
:現松戸中央公園正門

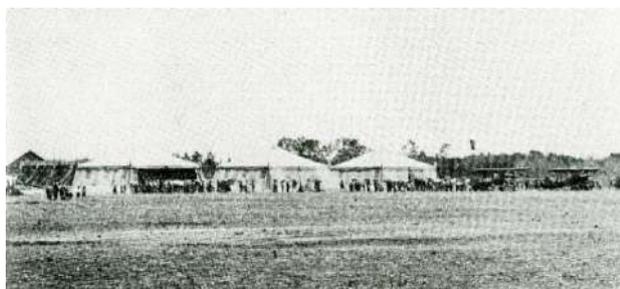


図 45 逓信省航空局中央航空機乗員養成所  
(『松戸市制 50 周年記念誌 はばたき』)

辺り町村の警防団や青年団、中等学校の勤労奉仕隊など延べ17,000人が参加して進められ、1940(昭和15)年5月に竣工しました。松飛台の地名はこの飛行場に由来するものです。養成所は民間の飛行士及び整備士の育成を目的とするものでしたが、有事の際に陸軍航空隊の乗員確保と首都防空用の飛行場として利用することが想定されていました。実際に戦局が悪化した1944(昭和19)年には、首都の防空を担う陸軍航空隊(第53戦隊)の基地として使用されました。終戦後は一部が自衛隊の駐屯地になりましたが、大部分は工業団地や住宅地として再開発され、今日に至っています。

こうした世情の中、1943(昭和18)年に松戸市は誕生し、戦後の1954(同29)年には旧小金町の大部分を編入してほぼ現在と同じ姿になります。

### 都市化と常盤平団地の生活

戦後の混乱を経て日本経済が回復し始めた昭和30年代に入ると、市域の大半を占めていた田園地帯が首都圏の住宅都市へと変貌していきます。その先駆けが常盤平団地の造成です。それまで畑と樹林が広がっていた金ヶ作の農村地帯に、ショッピングセンターや集会所、病院、学校、郵便局などの施設が備わる新しい街が建設されました。1960(昭和35)年4月に入居が開始されると、松戸市の人口も急激に増加していきます。松戸市発展の象徴ともいえる常盤平団

地では、食事をする場と寝室を別にする「<sup>しょくしんぶんり</sup>食寝分離」、ダイニングキッチンの原型となる「食事のできる台所」、水洗トイレやガス風呂など、今日につながる新しい時代の生活様式が導入されていました。



図 46 常盤平団地:星形住宅  
(『常盤平団地 40年の歩み』)